

講

演

(本紀要所載文章は凡て署名者の責任にし
て本會の意見を代表するものに非ず)

心學の本領

心學參前舍主 早野元光

一

心學の本領といふ題目を私は假に撰んだが、これは心學の内容、又は、心學の本質と云つてもいい。要するに心學の中味を打ちまけてこゝで話して見たいと思ふのである。

一口に申すと、心學とは「心ノ學ビ」である。しかし只、心と云つたのでは聊かわかりにくい。人間の内の中には、ともすれば雜念雜想が起りがちで、一つの妄想が滅すれば又一つの妄想が生ずる。所謂前滅後生だ。殆ど絶える時がない。世間では、それが即ち「心」であると思つてゐる人があるやうであるが、それは眞の「心」でない。そこで只「心」と云ふと紛れるから、心學では眞の心を「本心」と呼んでゐる。

心學の本領 (早野)

本心とは本の心、本然の心、本來の心である。何も我々が母胎から生れ出たときに新に出来上つた心ではない。迦れば、ずつと神代の昔から貫いて存在するものであつて、これから先も亦、何萬年何億年と一つに貫いて永續するものである。斯ういふ本來の心、つまり本心の實地を見届けるのが、石門心學の仕事である。

『中庸』には「天命之謂性、循性之謂教」とあるが、此の天命の性も、やはり本心である。又、『大學』に、「明德」とあるのも此の本心である。日本で「惟神」と申し、佛家で「佛性」といひ、「眞如實相」と名けるのも、皆別物ではない。煎じ詰めれば悉く本來の心、本心である。神と云ひ、佛と云つても、其の本體は唯一つであるやうに、名目の上では何と説き分けてあつても、歸する所は唯一心である。此の本心が、人間の身體の中に納まつてゐると考へると、甚だ小さいものゝやうであるが、所謂之を放てば六合に瀾るもので、縦には三方を貫き、横には盡十方に亘り、天界地界に充滿して、宇宙を蔽ひ包むことも出来る。故に大きく云へば、本心程大きいものはなく、小さく云へば、それこそ微塵よりも小さい、肉眼では所詮見ることの出来ないものである。故に古人も心ばかりは説くことが出来ないと言つた。心は實に説くことが出来ないばかりか之を思つて見ることすら出来ぬ不可思議な靈物である。

そこで心學は、此の靈物である所の本心を見届けるのが仕事である。此の事は前にも申したが、それ

も只漫然と見届けるのではない。掌中の物を見るが如く判明に見届けねばならぬのである。と云ふと、これは甚だ困難な仕事のやうである。何もそんなに苦んでまで本心を見届ける必要はあるまいと思はれる人があるかも知れぬが、本心は假にも此五尺の身體の本主である、主人公である。我と我が本來の心を知らぬ者は、主人を見知らぬ奉公人同様である。そんな奉公人に碌な仕事の出来る氣づかひはない。さあ、そこでどうしても本心を見極めることが必要になつて来る。

二

然らば、心學では、どうして其の目にも見られず、手にも取られぬ本心を見定めるかと云ふと、此處が肝要な所ぢや。石門心學二代目の手島堵庵が策問といふものを案出して、見事此の靈物の本體を見届ける工夫をされた。策問とは禪家で謂ふ古則公案と同じもので、有之るが故に、心學では自由自在に本心が見届けられるのである。

そこで心學の策問とはどんなものか。先づ一つ例を擧げて見ると、「父母未生已前ノ一句ヲ道ヒ將チ來レ」と云ふのがある。自分を生んだ父母が生れぬ前の一句を云つて來いと言はれても、これは普通の智慧では届くことでない。それではどうすればこれが合點出来るかと云ふと、心學では靜座工夫と云ふ事をやる。文字で書けば「靜ニ坐ス」で、此の靜座工夫をすれば、一念濶然として貫通する。希臘のソクラ

テスは、「汝よ、汝自身を知れ」と云つてゐるが、一念貫通すれば、父母未生已前の一句を言ふことも、自身を知ること、すべて思のまゝである。『大學』には、

知止而后有定、定而后能靜、靜而后能安、安而后能慮、慮而后能得

とあるが、これは靜座工夫して我が本心を見届けるまでの這間の消息を述べられたものである。故に心學の靜座は、世間によく在る何某式靜座と云ふやうなものとは、根本から目指す所が違つてゐる。何處までも本心を見開かうといふのが本來の目的で、肉體が健全になるといふやうな事は特に希はずとも、本來の目的さへ達成すれば自然に得られる。一旦本心を見開くことさへ出來れば、病氣どころか「死ぬ」といふ事がなくなる。人間が最も恐れるのは「死」で、少し感冒が流行すると皆が恐れる。二三日寢込んでどけで濟む事ならば恐れもすまいが、少し長引くと肺炎に成るかも知れぬと云ふので怖がる。ところが「本心」さへ確に掴む事が出來れば此の恐ろしい死といふ事が無くなる、そこで全く安心立命が出来る。心さへ安定してゐれば「病」も「死」も恐ろしい事はない。

一體も互人間の心には自ら一定の順序が立つてゐる。先づ眼耳鼻舌身といつて、眼で見、耳で聽き、鼻で嗅ぎ、舌で味ひ、身で觸れる。これが五根の働きで、畢竟此の五根が一切萬法に觸れて、梅の花があれば、眼が之を受取つて見て、美しいと感じて立ち止まらせる。又、自働車の警鈴を聽けば、耳が直

ぐに之を受取つて、危険を感じて避けさせる。是等の傳達は、實に間髪を入れない一刹那に而も順序正しく行はれるのである。此の梅花を梅花と識り、自働車を自働車と識るのは、所謂「識」であるが、識が出来る「意」が立つて之に添ふ、それが「意識」である。此の意識といふ事があるので、これは梅である、これは自働車であるとして、一度見た事聞いた事のあるものは、假令其の物が眼前に無くとも、よく覚えてゐて、いつでも眼前に描出することが出来るのである。此の意識は、五根の識即ち眼識・耳識・鼻識・舌識・身識の次に第六番目に來るものであるから之を第六識とも名ける。此の第六識が識つたことは、次に第七識があつて受取つて、之を更に奥にある第八識心王に訴へる働きをする。故に第七識を別に「傳送識」とも名ける。先づ執次の役人である。最後の第八識心王といふのは、畢竟、心の本尊の事であるが、第六識の知つたことが此處まで送り込まれると、例へば梅の花ならば、如何にも綺麗な花であるとか、美しくはあるが併し稍色が褪せてゐるとか、去年から見ると一倍よくなつたとかの見開きをする。そして之を改めて八識から七識へ、七識から六識へ、六識から又五識へと云ふ風に、今までの傳達順序とは逆に移送して、日用萬事に運用させるのである。斯ういふと梅の花一つ見ても甚だ手数がかるやうであるが、實際はこれだけの順序を経乍ら、而も一刹那に其の働きが行はれるのである。此の八識心王の場所には、自然の條理、無形の憲法が具はつてゐる。天にあつては元亨利貞、地にあつては春

夏秋冬の四季、人にあつては仁義禮智忠信孝悌の如く、必ず據らねばならぬ大道である。人の六識が一切萬法に觸れた場合、之を第八識に傳達した時に、それでは此の通りに歩けよ、と第八識の本心から傳へて來る。其の命令通りに運用して歩けば、それが即ち人の正道であつて、萬事は滞りなく都合好く進捗するのである。

ところが一念一たび迷ひ始めると、忽ち心の内は眞暗間になるから、筋道は前通りに立つてゐても、其の筋道を正しく踏んで行くことが出來ない。第六識までの道はどうか斯うか見分けられても、それから奥は見えないから、身其の位でない第六識が八識心王に代つて主人公となり萬事の分別を立てる。さうなると、眷屬と主人公との位置顛倒で、八識心王の眷屬たる第六識が、逆に主人公を驅使することに成る。此の場合には自然の條理、無形の憲法といふものを持たない第六識が、盲滅法に振舞うのであるから、善惡邪正は滅茶苦茶で、見る物に心を奪はれ、聞く物に心を取られ、我利我慾に使はれ續けて、遂には身體中が苦惱の入れ物になつて了ふ。随つて安心といふ事が無い。安心がないから病氣にも成れば死にもする。萬事が都合好く行く筈がない。

そこで斯ういふ時に、其の腹の中の眞暗間を打破るのが、禪家で云へば古則公案、心學で云へば策問である。「策」はムチ、「問」はトフで、鞭撻して尋ね問うのである。何を問うのかと云ふと、「父母未生已

前の一句を道ひ將ち來れ」「汝よ。汝自身を知れ」である。こんな譯の分らぬ事は、幾ら問はれても、口では言へよう筈がないが、其處が心學である。心の學ひである。此の試問の難關を明らかに乗り越える事が出来ればこそ、古人が言ひ置かれたのである。

三

此の策問は合して四十八則ある。前にも申した通り二代目の塔庵が之を編まれた。元祖の梅巖は師家に就て天命の性を明らかにされた人であるから、常々「性を知れ、性を知れ」と云はれた。それで元祖の心學を世間では「性理學」とも呼んだが、二代目の塔庵は此の「性」を「本心」と言ひ換へられた。そして後學者の者に本心を知らせるために、四十八通りの策問を作られたのである。これは二代目の拔山の方で、お蔭で大勢の後學が引上げられて、唯一つしかない我が本心を見届けた。實に偉い方である。禪門では柏隱老が出て、後學の爲に悟を開く順序を開かれ、心の本體の見える所まで引上げられたが、二代目の塔庵は、禪家で云へば、ちやうど此の柏隱に當る。しかし塔庵は元祖と違つて、禪家の力には依らず、元祖に本心を見開かれて、四十八則の策問を編まれたのである。其の策問の中に、「父母未生已前の一句を道ひ將ち來れ」といふ一則があることを申したが、これは其のまゝに禪家の古則公案である。此の公案については一場の話がある。

これは昔香嚴智閑禪師が、まだ佛心佛性を見開かぬ前の事であるが、或る時瀧山祐靈の所へ行つて佛法の奥義を論ぜられた。何しろ其れまでに一切經を三度まで見かへしたと自負してゐる程の大學者であるから、瀧山の前へ出て少しも臆せず、平常の蘊書を傾けて堂々と論じ盡した。すると瀧山は、其の間黙つてぢつと聽いてゐたが、十分に言はせて置いてから、「これはこれ汝が才の致す所なり、父母未生已前の一句を道ひ將ち來れ」と頭から浴びせられた。これには流石の我慢強い香嚴も即答が出来なかつたと見えて、後日を約して退席したが、寺へ戻ると、早速に今まで讀過した所の經典を悉く調べた。

しかし何處にも返事の挨拶は書いてない。明らかにもう香嚴の負である。そこで愈々兜を脱いで瀧山の所へ再び行つて、謹んで教を請はれた。ところが瀧山は之に答へず、「我が得底は我が得底、汝の與る所にあらず」と、ポーンと撥ねつけられた。取りつく島もないので、香嚴は悄然と引下つたが、獨つくと考へたのは、「己の名は學者として天下に鳴響いてゐる。然るに此の瀧山の語に對して一言の挨拶も出來ぬとあつては、最早寺を構へてゐる事は出來ぬ。此のまゝ大衆を扱ふのは欺くといふものだ。己はもつと修行せねばならぬ」と、到頭寺を開く決心をして、さすがは出家、身輕なもので、忽ち寺を開き、草鞋を穿き、頭陀袋を下げ、袈裟文庫をかけて、何處ともなく立去つた。其の後、年を経て、或る所へ聊かの庵室を結び、坐禪觀法、餘念なく修行した。所謂の靜座工夫を積んだのである。すると或る朝のこ

と、庵の周圍を自ら掃除して、塵芥を掃き集め、それを裏の竹藪に捨てた。ところが、其の中に瓦か小石でも交つてゐたものと見えて、パツと捨てた途端に竹に當つてカチンと聲を發した、其の聲に應じて豁然として悟が開けたのである。禪の方では、之を香嚴躍竹の聲といふが、さア香嚴は嬉しくてたまらない。所謂る手の舞ひ足の踏むを知らずで、直ぐに身を清め、法衣を改めて、香を炷き、遙に瀧山の方を向いて三拜九拜し、「和尚言句あらしめば、争でか今日の幸あらんや。——あの時に何一言も仰やつて下さらなかつたればこそ今日只今悟は開けたのである——あゝ師の恩、父母に超えたり」とお禮を述べられた。此の時にもう、瀧山は遷化せられた後だつたといふが、躍竹の聲に由つて香嚴は何を悟つたのかと云ふと、八識心王の顔をハッキリと認められたのである。もう此の哇一つさへ切れれば、あとは自由自在だ。それから又香嚴は改めて寺を構へ、大衆を扱はれたが、其の時に又妙な事を云はれた。「口ニ樹ノ枝ヲ銜ミ、脚樹ヲ踏マズ、手枝を攀ヂズ」と云ふのだから、これは大樹に上つて其の枝を口に啣へ、何處へも掴まらずにブラ下つてゐる形であるが、其處へ忽ち樹下に人あり、「如何ゾ是レ西來ノ意ト問ハン」に何と答へるか、さア道へ道へと云ふ問題である。これは頗る難題で、物を言はうとして口を開いて答へたならば直ぐに墜落して「即喪身失命」するであらうし、「若シ答ヘズンバ又他ノ所問ニ違フ」で、八識心王の筋目としてこれはどうしても答へねばならぬ場合である。今は自働車の世の中になつたが、

昔は辻々に人力車が屯ろしてゐて、人が其の前を通ると、「旦那、御都合まで如何さまで」とくつついて来る。そんな時に、乗らうと思ふ心があれば喜んで乗るが、要らない時には、「うるさい」とばかりに挨拶もせずに行き過ぎる。大抵の人が皆さうであつたが、八識心王の筋目から云へば、要らなければ要らないと答へるのが本當である。ところが第六識が増長してゐると、自分の都合一つで、答へたり答へなかつたりする。これは他の所問に違ふのである。だから禪家では、他の所問に對して如何なる時にも挨拶せぬと云ふことを許さない。そこで「正當恁麼時且作麼生」とう之に挨拶するか、さアどうだと云つて學者を鍛へられたのが右の問題である。二代目塔庵の策問四十八則の中には、これも亦浚へ込んである。だから、此の策問さへ通り貫けたら、八識心王の顔がハッキリと見届けられる。策問は畢竟、我が本心を見るための手引草である。秣である。秣がなければ馬は倒れるし、手引草が無ければ本心が知れない。しかし此の手引草の力で一旦畔が切れたら、あとは自由自在ぢや。我が心の居所が判然と見定められて、あゝこれが我が身の主人公だナと云ふ事が、教へられないでも獨で判る。すると今迄是が己の心、己の身だと思つてゐたのは、第六識の仕業で、本來は八識心王の雇人である者が、我儘勝手な振舞をして、心王を追ひ使うてゐたのだと云ふ事も初めて知れる。主従が顛倒してゐたのでは、人の道が眞直に行はれよう筈がない。之を一家の事で云つても、主人が主人の位置に坐つて家内中の者を使へばこそ、凡て

の事が滞りなく運轉出来るのであるが、其の地位でない第六識が無理をして八識心王の事をするのであるから、當然筋道が捻ぢ曲げられる。曲げられるから苦しい。萬事の運びも困難になる。心の苦艱は其處から生ずるのである。ところが、さういふ無理をしないで、萬事八識心王の正しい命令通りに動く事になれば、恰度高い處から低い處へ水が流れるやうに、物事が滞りなく進捗する、滞りがなから氣が樂である。此の世界が其のまま、安樂園、極樂世界で、何一つの不自由もない。そこで趙州は此の境涯を至道無雜と云つた。無雜とは無雜作である。六識が主に立つて無理をするから、むづかしいのであるが、チャンと筋道を通つて行けば、何の雜作もないのである。王陽明の「知行合一」も此の境である。

四

陽明學と云へば、熊本籠城で名代の谷干城將軍、あの人は四國の山内藩出身の士族であるが、元來陽明學を修められた人である。安政の三四年といふから、まだ少年時代の事であるが、上京して麴町隼町の安井息軒塾に學んでゐられた。或る日の晝頃、二三の朋友と共に錢湯に行かれて、其の歸り路に心學舎の前を通りかゝられた。恰度大島有隣が舎主の時代であつたらうか、表には「心學」の看板が出てゐて中を見ると、大勢の人が聽聞してゐる。谷將軍たちは「ハテ何だらう、どうせつまらぬ事を言つて、無智文盲な者を誑かすのであらう」と思ひ乍ら、素見半分に入つて見られると、講師は孝經を一同に讀ん

で聞かせて、分り易く俗談に落として述べてから、其の證例として名高い若狭の烈婦綱女の事を話された。これは、十四歳の子守女であり乍ら、主人の子を助けんが爲に我が身を犠牲に捧げて狼に食はれた忠烈の婦人であるが、其の事を懇々と一同に話して聞かされたのである。固より當時の書生といへば皆、衣肝に至り袖腕に至る粗暴な風體で、少年客氣の人たちであつたから、何れも無作法に胡座をかいて、「あいつ何を云ふか、聞いてゐてやらう」と云ふ位の心持で初は聞いてゐたのであるが、段々話が進むうちに、いつの間にか胡座も正座に改まり、講師の熱心に引込まれて、到頭しまひには泣かされて了つた。それで谷將軍は心から深く感じて、歸塾後率直に其の事を息軒先生に話されたところが、先生も「あれは非常に結構なものである」と云はれた。そこで其の事を將軍の意識が、早速に八識心王へ繰込んで了つたからもう忘れない。それから世は萬延・文久・元治・慶應・明治と移つて、十年の役には熊本籠城で武名を揚げられたが、其の後間もない明治十四五年頃になつて、不圖「あの心學は今もやつてゐるであらうか」と思はれたので、早速其の事を東京府知事に問合はされた。すると、川尻寶岑（これは私の師匠である）と、熊谷との二人がまだ續けてゐると云ふ返事があつたので、將軍は之を市ヶ谷の自邸に招いて道話を聽かれ、續いて道話を起されて、四谷、千住、淺草、日本橋、品川の五ヶ所で毎月三日宛の講筵を順次に開かれた。そしてこれから愈々道話が初まるといふ時には、必ず自分が出て行つて

會を起した所以を熱心に講ぜられた。將軍が人前へ出て話をされたのはこれが抑もの初で、以來段々上手になられた揚句が、貴族院議員にまで成られて、鯁骨の辯を振られたのは名高い事である。

ところが此の道話會を開くについては、講席を借りる交渉役も要れば、又、下足番も要る。心學會の慣例として來聽者には茶菓子を出す事に成つてゐたから其の方の世話人も要る。随つて諸拂の會計をする者も要る。そこで重立つた人としては、土方久元、佐々木高行、平山省齋（先年物故された平山成信の養父である）等十人程が集まつて、色々の世話を焼いてゐられたが、當時内匠寮に勤めてゐた私は、役所が三時引けであつたのを、會の日には課長に頼んで特別に一二時間早く退廳させて貰つて、缺かさず聽聞を續け、道話會の諸拂會計方を任されてやつてゐた。さうして段々聞いてゐると、問題に掲げられるのは論語や大學の文句であるが、それを平易に解説されるので、如何にもよくわかる。そこで或る時、熊谷老に、この心學をやるには何か以心傳心と云ふやうな事があるのかと聞くと、あるからやつて見たがよからうといふので、熊谷老から四十八則の策問を授けられた。それを自分でやつて見ると、何の事も無くスラスラと濟んだ。それで今度は川尻に、心學といふのはあれだけの事かと聞くと、熊谷のは濟んだかと聽かれたから、「濟んだ」と答へた。すると、「それならまだ外にある。私が一つ上げよう」と云つて新に授けられたのが策問四十八則には無いもので、

冬籠 又寄りそはむ此の柱

といふ發句である。これは芭蕉翁の句ださうであるが、「さア、これで柱に入れるから入れ」と云はれた。これには私も閉口したもので、通るのに約一年ばかりかゝつた。最初は毎月三四度顔を合はせる度毎に自分の意見を述べたが、後にはグツともスツとも云へなくなつた。恰度其の頃、私は鎌倉へ參禪に行かうと思つたので、師匠川尻の所へ言ひに行くと、川尻は、まだ先般の問題が濟んでゐないから、行くまでに三日間靜座工夫をやつて行け、それが濟んでゐぬやうでは鎌倉へ行つても透過はむづかしい。と言はれた。しかし私も既に決心して來た事であるから、「ち言葉通り大方むづかしいであらうが、併し準備をして來た事だから、出來ないまでもやつて來る。若しそれでどうしても通れなかつたら、改めて兜を脱がう」と背水の陣を布いて出かけて行つた。行つて見ると、外の書生たちは半分晝寢をしてゐる有様であつたが、私は此の機會を外したら又いつ來られるかわからないと思ひもしたし、殊に師匠川尻に誓つて來た言葉もあるので、色々と工夫を積んだ結果、其の時に洪川老の手許で通過して歸つて來た。さうなればどの道を通るのも一つであるから柱へ入るのも自由である。それからは愈々心學に従事する事となつて、今日に至つたのであるが、其の間に起つたのが明治二十七八年日清戰爭當時の地震である。

當時川尻は兩國にゐたが、私は最初にゐた辨天町から引越して、一番町に住み、其處から毎日宮内省

へ通つてゐた。出勤時間は年中通して九時の定め、退廳は前にも申した通り三時の定めであるから、日の長い頂上には、歸つてから日の暮まで五時間ばかりも餘裕があつた。地震のあつたのは大正の時と同じくやつぱり正午頃で、勿論在廳執務中であつたが、安政度以來と云はれた大地震であつたから、大藏省などでは怪我人まで出した。日本の洋館建築が一新したのは其の時以來で、それまでは天邊に花立式の石の飾り物を列べたりしてあつたのが、皆落ちて地びたへめり込んで了つたので、急に改めたのである。私は豫てから、地震の時には、手近な卓の下へ身を潜めるのが一番安全である、さうすれば假令上から天井が崩れ落ちて來ても支へられると信じてゐたので、ヤツ地震だと感じると、直ぐ椅子をずらせて、卓の下へ入るつもりで、身を屈めかけたが、半身を入れかけて向ふを見ると、室内には殆ど誰もゐない。唯一人だけが私の仕ぐさを見て、どうしようかと躊躇してゐられた。やがて揺れが止つてから、廊下の方を見ると、内匠頭がユツクリと玄關へ出て行かれたので、私も直ぐ其の後に續いて庭へ出て見ると、宮内省中の殆ど全員が廣場へ出てゐられたが、大抵の人が皆、落ちて來た瓦の破片で顔や指に負傷してゐられた。其の時に私が自分の胸へ手を當て、見て嬉しいと思つたのは、一つも動悸が打つてゐなかつた事である。これは古い事から話さねばわかりにくいだが、元來私は、何か變事に出會ふと、必ず胸がドキドキと動悸を打つたものである。私は八つの年、満年で云ふと六歳何箇月といふ時分から漢學

の稽古を初めて、それから十歳頃には、弓術、劍術、銃砲術と毎日朝から夕刻まで各師匠の處を廻りあるき、晩には又、算術讀書の教授を受けに行くと云ふ有様であつたが、其の夜の部の師匠は士族で、學者であつたから、大學の素讀を教はつてゐた。ところが或る晩の事、稽古が濟んで、内室に送つて出て貰ふと、臺所の戸があいてゐた。内室はそれに氣がつくと大聲を出して、「泥棒が入りました。泥棒が入りました」と叫び立てられた。其の時私は、それを聞くと、忽ち全身がガタガタと慄へ出して、ヂツと立つてゐられない位膝がガクガクした。そして胸は高波を打つて鼓動してゐた。其の時の事は、第六感が、八識心王に直ぐと傳へ込んだから、今でも忘れずにハッキリと覚えてゐる。それに此の地震の時ばかりは、不思議に胸が靜で、高い鼓動がない。見ると外の人たちは皆蒼い顔をしてゐたから、私の顔色も蒼かつたか知れぬがしかし動悸だけは確にない。それで私は心から喜ばしく思つて、これが日頃の靜座工夫の効能だらうと氣がついた。此の靜座工夫の仕上げは、一方から云ふと知行合一で、内から鍛へ込むのであるから、外からの附け焼刃とは土臺が違ふ。それから段々功を積んで、全く此の身の無いといふ事を本當に知つて了へば、大きいものである。二代目塔庵も本心の養ひ方を色々云つてゐられる。「柱の中へ入れ」とか「父母未生已前の一句を云へ」などと云ふやうな事を一寸聞くと、まるで取りつき端が無いやうであるが、落ちついて考へて見れば、何でも無い無雜作に通れる路である。

甲州武田家の歸依僧慧林寺の快川和尚が、織田軍の放つた猛火の燃え熾る中に靜座して、「安禪は必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し」と唱へ、一同と共に焼け死んだのは名高い話であるが、「心頭ヲ滅卻スレバ火モ自ラ涼シ」、これは實に尊い一句である。心學の策問の中にも、「地獄有りや無しや」と云ふ事がある。これは有るか無いかの挨拶を求めるのであるが、其の繰返しに又、「果して有るか無いか」と云ふ一則があつて、今一つ奥に「地獄の赤鬼が火の車を引張つて來て其方を捕へ、火炎の中へ投げ込んだ時にどうして苦を逃れるか」と云ふ調べ物がある。これは勿論、假に設けた問であるが、いつ何時實際に火で蔽はれて焼け死ぬ事がないとは限らぬ。人間生き身であるから、死の縁は無量である。太平の時でも必ず疊の上で死ぬとは定まつてゐない、いつ何處でどんな死に方をするかわからぬ。さア其處で、若し火に包まれて何處へも逃げ場所が無い時に、どうして其の苦を免れるか、答へて曰く、「心頭ヲ滅卻スレバ火モ自ラ涼シ」此の一句より外にはない。心學は此の見聞きをする爲の心の學びである。手前味噌のやうであるが、先づ云つて見れば、こんな工合である。

五

そこで、今一つ序に手前味噌を附け加へて置くと、前に申した明治二十八年の地震のあとで、内匠寮が一時清寧館(此處は午砲を撃つ場所に甚だ近い)へ引移つて事務を執つてゐた時、多くの吏員中で私一

人だけは、ドンが鳴つても平氣で事務を續けてゐたので、或時それを見た課長は、「心學をやると無神經に成るのか」と云はれたが、私は「イヤ無神經ではない。寧ろ神經が鋭敏なのである。一體人は何で驚くのかと云ふと、不意を打たれるからである。これから鐵砲を打つぞと前以て知らされてゐれば、誰も驚かない。私がドンに驚かないのは、外の人よりも早くドンを知つてゐるからである。これは神經の鋭敏な證據ではあるまいか」と云つた。これには課長も遂に一言無かつたが、これが又、知行合一の好い例である。途中で第六識が頑張つて八識心王を追ひ使ふから、こだはりが出來て見聞が暗く成るのであるが、靜座工夫を積んで本心への筋道が開いてゐれば、むづかしいと思ふ知行合一も、父母未生已前の一句も此の通り誠に無雜作なもので、超州の所謂至道無雜だ。至極の大道は決してむづかしいものではない。心の筋道さへ整へば、何事もサラリサラリと行はれる。これが即ち無爲自然の道である。

弘田山己子

げさよりは吉きおとづれをとりのとし

人をも身をも祝ひかさねむ